

## ■平成29年度第2回調布市せんがわ劇場運営委員会議事録（要旨）

日程：平成29年10月20日（金）午後6時30分～午後8時30分

会場：仙川ふれあいの家

委員：伊藤，村上，宮崎，荒川（委員長），山根，大菊，川添，城戸

コーディネーター：末永，松井，合田，間瀬

事務局：伊藤，岡野，吉池，内田，新川

傍聴者：2人

### 議事

#### 1 平成29年度上半期事業実績について

##### 【使用資料】資料1

事務局から説明

以下，発言の要旨

委員長	演劇，音楽，アウトリーチといったように，大きく分けて議論を進めていきたいと思う。運営委員会は，来年度以降，継続的にせんがわ劇場の活動が発展していくように，建設的な意見を述べるというのが使命だと考えている。まず，山根委員，演劇事業で観られたものがあるか。
山根	演劇コンクールは年々，いろんな意味で広がってきている。一般審査員については，初めは調布の人たちだけだったのを，今は市外の方も含め広く募集している。若者から高齢者まで，演劇をずっと観ている方もいれば，初めて観たという人もいる。様々な意見があっていいと思う。初めての人というのは思いもよらない意見を出すときもあるが，参考になる意見が多いと思う。この募集も，毎年変えているか。 今年は地方の劇団が本選にいなかった。
末永	本選にはいなかったが，中国地方や群馬県などから応募があった。
山根	全国的になってきているという意味では，広げ過ぎという問題があるかもしれないが，ここまで続けてきた成果が，少しずつでも上がっているのだと思う。 過去に参加した方が，今度の市民参加演劇公演にも携わってくださるそうで，そういう意味で広がりがあり，成果も上がっていくと思う。マイナスな面もあるかもしれないが，怖がっていたら何もできないので，今後も前向きな気持ちでやっていただければ。
委員長	大菊委員は，気になるものや参加されたものなどあるか。
大菊	提携公演のせんがわシアター・セレクトを観た。各地でやっている劇団だけあって，とても楽しめた。せっかく調布での凱旋公演なので，もっと調布，あるいは仙川で喜んで受け入れられるような態勢があるといいと思った。 出演した劇団の演出家の方は，市民参加演劇等で何年もこの劇場や市民と関わりをもっている。もっと早目に知っていたら誘えたかもしれないといったことがあったので，もう少し劇場や地域で還元できるといいと思った。
宮崎	クリスマス公演の「シンデレラ」について，チケットは発売開始と書いてあるが，チラシをみると入場料が書いてない。これは本チラシのコピーか。また，入場料はいくらか。
末永	これは仮チラシ。入場料は一般が2,500円。親子ペア券は3,000円。本チラシは間もなく出来上がる。

	<p>広報する場があったので急遽作成した。表1面のモノクロ刷りであるので、どこまでの情報量を載せるか検討し、日にちと出演者、問い合わせ先、チケット発売日を記載した。本チラシを準備しているということで、情報量を抑えた。</p>
山根	<p>宮崎委員からあったように、仮チラシも外へ出すものなので、入場料は記載があった方がよいだろう。</p>
宮崎	<p>おそらく、チラシをみた人は混乱すると思う。無料なのかと思ってしまうかもしれない。提携公演で、予算が220万円で市からの補助金が100万円とあるが、差額の120万円は提携先の劇団の負担か。</p>
末永	<p>提携公演は、人件費、チラシ・ポスターの宣伝印刷費等を劇場の方で予算化した。チケットの販売窓口は劇場と2劇団の3つあった。各劇団扱いのチケット売り上げはその劇団の収入として、その財源を舞台費に充ててもらった。そこに関しては各劇団が予算化した。劇場のチケット収入は、劇場扱いのチケット収入の約10万円。 先ほど宮崎委員からあった差額分は、各劇団扱いのチケットで売った部分である。</p>
宮崎	<p>市民参加演劇公演についてだが、出演者は市民のみか。</p>
末永	<p>毎回、出演者の中に俳優の方も2、3人入れて、演技指導を兼ねてやってもらっている。今年度、契約をした俳優は2人。また、市民参加演劇をとおして演劇活動を始めている方が2人おり、その方々をこちらからの選抜ということで出演してもらっている。ほかの出演者は全員市民。</p>
宮崎	<p>ドラマタークの方を個人的に知っているが、この方をドラマタークにするときに、どう専門性を保証しているのか。例えば、ドラマタークを養成している劇場もあって、そこを卒業した方だというのならわかるが。専門的なところになるが、説明いただきたい。</p>
末永	<p>作者とドラマタークの方は、名前が違うが同一人物。専門的なドラマタークの養成をしてはいない。</p>
宮崎	<p>劇作家になりたい人はたくさんいると思う。その中で、調布市の事業の作者をどういう経緯で選ばれているのかを知りたい。</p>
末永	<p>最初の「わが町、せんがわ」というシリーズ3部作は、ある程度プロット的なものをつくり、参加者が決まってから当て書きするというのをずっとやっている。そのときに、様々なところで作品づくり等に協力していただいたのが今回の作者。</p>
宮崎	<p>戯曲を書いてもらう劇作家のプロフィールはすごく大事だと思う。謝金も発生する中で、言葉は悪いが、身内のように感じる。こういった委員会の場で、委嘱するに足る実績のある劇作家であるということをチェックするのも私の役割なのかなと思うので、その辺りをどう決めているか伺いたい。</p>
末永	<p>市民参加演劇公演は、劇作家の実績や実力だけでは対応し切れないところがある。これは市民参加演劇公演をやるときの方針で、参加してくれた人たちのための役を書く、その人しかできない役を書くというのがある。そういったことを追考する作家に書いてもらうということで選んでいる。 その他の公演事業については、劇場で次世代芸術家を育成するためにコンペをするなどして作家を選んでいる。</p>
宮崎	<p>プロフィールがあるとよい。例えばなんらかの賞を受賞した等の経歴があるとわかりやすい。 おっしゃっていることは演出家としては正しいと思う。演出家が協働作業をしたい劇作</p>

	<p>家と組むというのは当然のことで、それは理解可能だが、市としてのスタッフのキャリアの保証って大事なのではと思う。これだけのキャリアを積んでいるから、劇作を調布市が委嘱するに足る人材であるという資料が欲しい。</p> <p>加えて疑問に思うのは、なぜ劇作家がドラマタークをやっているのか。名前を変えればいいという問題ではないと思う。同一人物が作家であり、ドラマタークであるというのは、私の常識からするとあり得ない。つまり、劇作家が自分の作品のドラマタークになるというところに矛盾を感じている。</p>
川添	<p>ちなみに、作とドラマタークの違いはなにか。</p>
宮崎	<p>作家というのは、戯曲を書く人。ドラマタークというのは、主にドイツから始まった、演出家とも違って、時代考証を行ったり、演劇界全体、世界の潮流などをみて、演出家にどういう方向性で作品をつくったらいいか、客観性をもってアドバイスを行ったりする人。アメリカだとプロデューサーがこういったことを行っているが、ドイツだと公共劇場には必ずドラマタークがいる。今、日本でもやと普及してきたクレジット。</p> <p>このように、作品に対して第三者的に客観性をもってどういう公演にするかというのをみるのがドラマタークのポジションなので、作家とドラマタークを同じ人がやっているというのは機能してないと思う。</p> <p>そういうことに対するチェックは市の方でどのように入れているのか。例えば、大学であれば、人事を起こすときに、その人の過去の作品等、キャリアというのは全部洗い出す。</p>
事務局	<p>市の職員は、例えば、作者はこの人が適任なのかどうかといったところは正直言って分からない。劇場としては、専門家ということで専門嘱託員とコーディネーターにそれについて一任しており、そこで選ばれた方たちなので、信用してやるしかないと思っている。</p> <p>ただ、今の意見も確かにも思うところがあったので、その辺りについては、今後、こちらの方でも注意していかないといけないと思う。</p>
合田	<p>演劇のことはわからないが、音楽は2人のコーディネーターでコーディネートし、音楽担当の嘱託職員とミーティングをしてプログラムを決める。ヒエラルキーからいくと、コーディネーターが基本的には決定権をもっている。その部分に関して、専門的であるからこそ、市の職員の人はわからない。</p> <p>以前この委員会でも言ったが、少しわかりづらい部分がある。だからこそ、運営委員会で専門の委員の皆さんがその辺について質問をすることによって、特に市の税金を投入しているからこそ、不正であるとか、わかりにくいということでもなく、その辺を担保されることは大事なのだと、ご意見を聞きながら思った。</p>
宮崎	<p>演出家が一番創造しやすいスタッフィングをすることがもちろん一番望ましい状態ではあるが、第三者的な目でみると、同じ人が名前を変えて入っていることを正当化できない。作家がドラマタークを、名前を変えてやっていることは筋が通らないとみえてしまう。正当性を担保するには難しいなと思うので、ご検討いただければ。</p>
委員長	<p>専門性のある話で十分な理解は難しかった。視点がはずれてしまうが、私はイベント実行委員会の委員でもあるが、そこで会計監査をしている。その中で通帳とかをチェックをしているが、1つも不正ということはもちろんなく、大ざっぱにやっていることもないが、音楽や演劇は日常からは離れたものなので、委託料等の経費が実感として正しいのかどうか全然わからないところがある。ただ、正しいことがされているというのはわかるが、そこは税金が入っている公共劇場として難しいところもあると思った。</p>

	<p>いいものをつくろうという方向は変わらないと思うので、事務局の方でも考えていただき、引き続きこういう話ができたらと思う。</p>
末永	<p>物に対する費用は抑えられても、人に対する費用は抑えられないため、予算のやりくりの中で兼務ということはよくある。兼務してもらっていても、クレジットを複数書くことは難しいので、まとめて一つのクレジットにしていることがある。</p> <p>ただ、作というのは結構大きいので、別で入れている。別に意図があって、ペンネームと本名を使い分けているわけではない。</p>
宮崎	<p>でも、それはかなりまずいと思う。名前を変えて同じ人が2つのクレジットをもっている状態は。</p> <p>誤解を呼んだかもしれないが、公共劇場がドラマタークを置くというのはすばらしいということは伝えておきたい。というのは、先ほど申したアメリカ型のプロデューサーが仕切る世界は、いわば興業。もうかるものをつくるためにプロデューサーが動く。対してドイツ型というのは、芸術性を追求するために、ドラマタークという人がプログラミングをするという、芸術至上主義の象徴的なものである。ドラマタークの必要性は演劇界でもどんどん浸透してきて、公共ホールでも養成とかプログラムが行われている。だから、せんがわ劇場がドラマタークを置くこと自体には大賛成。</p>
合田	<p>市の職員がいても、その詳細の部分はわからない。だから、基本的には演劇や音楽などの専門のところはコーディネーターに投げられている。基本の判断はコーディネーター。</p> <p>コーディネーターというのは、基本的には市側において、全体をプロデュースする。今のドラマタークを置くというのは、コーディネーターの部分と、作、演出、全部の構成、キャストからスタッフから全部メンバリングをしていく部分が全部同じラインで、同一性が問題になるんじゃないかと、話を聞きながら思った。その辺りの方針について、市で、例えば、コーディネーターはこうあってくださいというような形をもつことによって、少しずつ変わっていくのかなと、今話を聞きながら思った。</p>
事務局	<p>いつもスタッフに同じ名前の方が並んでいるとか、作家とドラマタークが一緒というのは問題じゃないかという話もあったが、やはり閉鎖的なところかなというのは感じている。劇場でやっている演劇コンクールのファイナリストといった新しい方たちに、劇場に関わってもらおうというところにも力を入れていかないといけないと思っている。</p> <p>ただ、これからを担っていく芸術家の方たちなので、キャリアという点は弱いかもしれないが、顔ぶれを変えていくのも必要だと感じている。</p>
宮崎	<p>せんがわ劇場をサポートしてくれて、やっと協働作業が可能になっているというときにメンバーを変えなければならないというのは、創造する側としては苦しい。</p>
末永	<p>今年は、その点でいうと失敗していて、一昨年からその世代に演出をしてほしいと依頼をしたが断られた。次回の演劇公演は2人手を挙げてくれており、次の世代に渡していかなければならない。</p> <p>同じ人がずっと関わることは、つながりができていい。しかし、一方で、後を継ぐ人がいないと大変になるのも現状。</p>
委員長	<p>次に、音楽について。「JAZZ ART せんがわ」や、「サンデー・マティネ・コンサート」等、何か質問や感想があれば。</p>
城戸	<p>「JAZZ ART せんがわ」の感想で、1つの番組しか観てないので大きなことはいえないが、資料に「市民の裾野を広げるプログラムを提供します」とある。裾野を広げるには</p>

	<p>山の頂を高くするという方針があるが、頂が高過ぎると、登ってみるのをやめようかなと思ってしまうことがあると思う。そのようなことから、JAZZの初歩的、入門的な番組が「JAZZ ART せんがわ」の中に1つあれば、せんがわ劇場でJAZZの演奏があるんだ。観に言ってみようかなと、今までせんがわ劇場に足を運んでない方にも、足を運んでもらえるじゃないかなと思った。</p>
合田	<p>念のために申し上げますと、「JAZZ ART せんがわ」を、音楽コーディネーターは音楽の分類に入れたいしてほしいと何度もいっている。音楽コーディネーターの管理下でない企画。確かに、ジャズというと世の中の的には音楽の分類だが、コーディネートや制作している部分に全くない。音楽でやるとしたらこれほどの予算をかけたたりしない。私たちの管理下だと、「サンデー・マティネ・コンサート」をみていただいてわかるとおり、20回やって170万しか使わない。この事業は、芸術監督制度のときにスタートした企画が続いているもの。正直、何をやっているか、私たち音楽コーディネーターはわからない。</p>
事務局	<p>この事業は音楽の分類に入っていないという話があったが、特にうちの劇場でやっているのは、即興音楽とよくいっているが、音が音楽だという感じに、曲になってないものが多い。ちゃんとした曲をやる方もいるが、はっきりいってよさが分かり辛い。最初、地域の方からも、何をやっているかわからないという話もあったが、開館から毎年やっている。今回10回目だったが、10回やっている、何となく定着してきて、地域の方からも、また駅前にジャズ屏風が出ている等の話が出る。子供対象にも何かやりたいというところで、近場にある公園で楽器の演奏をして、子どもも参加できるような取組もしている。</p> <p>今年は、10回目という記念の年でもあるということで、盛大にやりたいとプロデューサーから話があったため。昨年までは土日と金曜日に前夜祭のようなものやっていたが、今年は1週間だった。来年度以降はまた例年の予算に戻っている。</p> <p>観に来ている方は、他のイベントと違い、これを目的に日本中から来ている。地域の方でなく、遠方から毎年これを楽しみにしてきているという方もおり、一概に、いい悪いというのは言い辛いイベントだと思っている。</p>
委員長	<p>白百合女子大学の職員からも、年々すごくなくなっていると聞いている。存在感がだんだん出てきているのかなと。</p>
事務局	<p>海外の演奏家も多く出演している。この予算でこれだけの方が呼べるのかという話を聞くと、プロデューサーの方も頑張ってやってらっしゃるのだと思う。ただ、この事業の良さを伝えるのは難しいと思っている。</p>
合田	<p>年によって予算は違うのだろうが、これだけの予算をかけて、劇場の中心企画として続けていくのか。企画の金額と構成でどう評価するかというのは考えなければならない。</p> <p>正直いうと、これを音楽の分類だと書かれても、私たち音楽コーディネーターは評価に対する責任をもてない。音楽事業のことで質問されれば、こういう趣旨、ポリシーがあつて実施しているのだと全部説明できるが。</p> <p>ジャズはこのまま先も続けていく必要性、市民にどう還元されていくか、町づくりにどうかといったことは、誰かが説明できないといけないと思う。</p>
松井	<p>ここでそれを説明できる人がいないというのは問題では。</p>
合田	<p>続けていく先にどういう構想があるのか、見据えていける説明を誰かが本来はすべきなのだと思う。</p>
事務局	<p>この事業は、もともと町の活性化を目的の1つとしてやっていた。ここ数年は、せんが</p>

	わ劇場だけでなく、仙川地域の飲食店が協力して、パフォーマーがそこで演奏やダンスをしたりしている等、町の活性化につながってきていると感じる。劇場だけで完結しているのではなく、地域に出ていく催しにもなっている。そういった評価も入ってくると思っている。この先については検討していかなければならないと思う。
委員長	難しいが、評価という視点があるのかもしれない。これはお金や人数等の量的なものではないと思う。
大菊	それぞれのコーディネーターが、それぞれの企画の成功について責任をもっているという運営体制だと思うが、そうすると、ここに「JAZZ ART せんがわ」のプロデューサーが来て説明するのがいいと思った。10年続けると初年度にプロデューサーが宣言して、それを達成した。少ない予算でアーティストを呼んでいることについても、普段のお付き合いの上でできているのだと思う。と同時に、それはこの地域が望んでいることなのかどうかというのも、きちんとつなげないといけない。丁寧にやっていく必要があると思う。
宮崎	ジャズのプロデューサーは、5人目のコーディネーターの立場か。
末永	違う。
宮崎	この方は組織図でいうとどこに含まれるか。
事務局	単独。
末永	昔はフェスティバル実行委員会というのがあり、その企画の1つという形だった。
合田	その部分の取り扱いは、今はないか。
事務局	ない。
合田	つまり、この事業について説明する仕組みがない。さっきの話からいくと、誰かがその方向、責任を持つべきだと思う。そうすると、館長のところへいくと思う。
事務局	最終的には館長の裁量になるかもしれない。
宮崎	館長に直づけしているということか。だから、音楽の分類に「JAZZ ART せんがわ」は入っていることが間違いということになる。
合田	世の中的にはジャズだから音楽の分類だろうといわれるかもしれないが、ここで区分けしている分類からいくと違う。
委員長	先ほど10年で一区切りみたいな話があったが、来年も予定どおりか。
事務局	今のところは。ただ、予算については、例年のものに戻ると思う。
委員長	今年は、成果としては成功という判断でよろしいか。
事務局	はい。
大菊	できれば、資料の中に、参加者アンケートがあると、声が直にわかる。
事務局	参加者からはとっていないが、観客からのアンケートはとっている。
大菊	情報であれば何でも。議論するために必要だと思う。
委員長	「せんがわピアノオーディション」について。成果や、何か特筆することがあれば。
合田	ここは音楽専門ホールではない。芝居小屋の要素が強い。いつも、音楽コーディネーターと担当の嘱託員で話をしているのは、よい響きの中で、お金をとるサロンコンサートのようなものは想定していないということ。よいものを聞くのなら、都内のいいホールへ行ってもらおう。むしろ、この劇場では、最初のステップのところを汲み上げていこうと思っている。教育系のプログラムが多いのはそのせい。 しかし、その中で、世の中のホールで主に扱うピアノがこの劇場にはある。ピアノの選

	<p>定のときに、市の職員から別のピアノはどうかという話がある中で、このピアノをお願いし、それを活用しようというプロジェクトを随分最初の頃にしてきた。啓蒙活動とは別に、将来の音楽家のための企画を劇場としてスタートした。それが「せんがわピアノオーディション」で、今年で6回目になる。</p> <p>ここ数年、海外からわざわざ帰ってきて出場する方たちがいる。夏休みの時期に行うのには、日本で開催される本格的なコンクールの前にぜひ弾いてもらいたいという意味合いもある。ぜひ若い音楽家にチャンスをとということで始めた事業である。一番のポイントは、優勝賞金はないが、上位の方に劇場で演奏会の場をつくるということ。聴衆に聞いてもらう機会をつくるのが一番のご褒美だという発想で、受賞者コンサートをしている。</p> <p>集客が大変な時もあるが、それもバックアップして演奏会デビューの機会を1つでもつくってあげたいというのがこの受賞者コンサートの趣旨。1位の方は1時間半のフルコンサート、2位、3位の方たちは1時間半をシェアして、ハーフコンサートのような形にするが、調整が難しいと「サンデー・マティネ・コンサート」に出たりするときもある。</p>
松井	このところお客が増えている。市民審査員の希望者も増えてきている。
委員長	次に、アウトリーチに関して。何か質問や意見があれば。
事務局	<p>西部児童館で実施した、東京室内歌劇場の方の演奏会についてだが、せんがわ劇場が調布市の中でも東部地域にあるということで、全市的な活動をもっとしたらどうかという話を様々なところからもらう。その中で、西部児童館のホールを使って、西部地域の方たちにも音楽を聞いてもらおうということで実施した。</p> <p>当日は学童の子ども達含め約70人来ていた。子どもが大勢来ることは予想していたので、子ども達と一緒に踊ったり歌えるようなプログラムでやってもらったが、大変盛り上がった。周辺の福祉施設の子ども達だと思うが、高校生ぐらいの子もグループで来ていた。最初、学童の子ども達と障害者の子ども達が分かれていたが、音楽が始まると垣根がなくなって、一緒になって楽しんでいた。</p> <p>残念だったのは、一般のお客が少なかったこと。やり方を工夫すれば、もっと地域の方を呼び込めたと思う。ただ、今回初めての取組としては大変よかったと思っている。</p>
松井	公民館の方からも、こんなことができないか等のアドバイスをもらった。土曜日にやれば親子で来ることもできるだろうと。意見をたくさん聞くことができた。
山根	西部公民館は立地に難しいところがある。
事務局	西調布から歩いて15分ほど。小学校が近くにあることから、子ども達は来やすいようだった。地域の方が使うには便利なところにあるが、遠方から行くのは大変だと思う。
委員長	せんがわ劇場のアウトリーチ活動についてよく聞くようになってきた。
事務局	調布市文化・コミュニティ振興財団や社会福祉協議会でもアウトリーチは行っているのので、どこかで調整しながら、分担していくことも考えていかなければと思っている。
委員長	委員の方々も、アウトリーチに今後注目していただければと思う。
大菊	放課後デイサービスのようなものが市内に複数できてきているが、成果が上がってくれば依頼が来ると思う。そういった場合は、有料になるのか、また、どういった形で申し込めばいいか。あるいは、まだその段階ではないか。
末永	まだその段階ではない。内規的な基準は決めている。学校に関しては、特別に予算を組んでもらえる学校もあるが、基本的に講師1人に2,000円というのが決まっているそう。足りない分を劇場の補助金で賄っている。児童館や公民館は1回大体5,000円。

	<p>こちらも決まっているようで、1人に対してではなく1回あたりの金額と聞いた。</p> <p>デイサービスは、協働研究というのもあり、今は費用をいただかないで、保護者へのアンケートや、了承を得た上でのモニタリング等、協力してもらっている。</p>
大菊	そこが分かりやすいと、頼むほうも頼みやすいと思う。
末永	プログラムをアーカイブ化しているが、規模等ケース・バイ・ケースなので、目安を示す必要があると思う。
合田	今、大学自体が社会貢献というものを評価されるので、大学自体がアウトリーチの仕組みをもっている。
末永	音楽のアウトリーチはそういったつながりもあり、広がりが期待できると思う。
合田	<p>学校の授業に音楽という科目があるため、音楽の担当の先生がいる。これは演劇と大きく違う点。今、せんがわ劇場に行こうという企画で、劇場が空いているときに、子ども達に劇場に来てもらい体験してもらっている。それが、劇場に来るきっかけになるだろうとやっている。今のところ、毎回来てくれるのは、地元の調布市立緑ヶ丘小学校だけ。先日、調布市立第一小学校に行って弦楽四重奏を聞かせたが、その後、もう一度それを聞きながら、図工の時間に絵を描く。音楽の先を、先生たちがどのように他の授業に生かそうかという、先生たちの発想自体が生きてくるような取組になってきている。</p> <p>調布市の場合、6年生になるとグリーンホールで東京都交響楽団の演奏を聞く機会がある。学年ごとに段階的に音楽を聞かせたいと、先生たちがプランを考えるようになってきている。音楽の授業で、先生たちが日ごろやっているものの積み上げの先で大編成に行くという、組み立てにマッチするものが提供でき始めている。学校のアウトリーチは今のところいい感じで進み始めているという気がする。</p>
委員長	最後にフリンジ企画について何かご意見あるか。
事務局	<p>市民参加演劇公演で「わが町、ちょうふ」と題して行うので、市内を巡る町歩きという企画を実施した。</p> <p>また、T B T Bというアメリカの劇団についてもとても印象深かった。</p>
末永	T B T Bはニューヨークのプロの劇団。
事務局	<p>劇団員として活動している障害のある方が、島根県の演劇祭に出ており、その途中でせんがわ劇場に寄ってもらった。急遽決まったので、一般市民の方にお知らせが間に合わなかったが、福祉施設の方等に呼びかけて、来られる方だけ来てもらって、劇場のホールでどんなふうにするか観させてもらった。</p> <p>衝撃的だったのが、電動車いすの女性が、普通に舞台上上がって普通に演技をしているということ。それはとても新鮮だった。この劇場の舞台上で、電動車いすを使って演じるというのを初めて観たが、衝撃を受けた。準備が間に合えばもっと多くの方にみてもらいたかった。コーディネーターと相談しながらそういったところも広げていけたらいいと思っている。</p>

配布資料

【資料1】平成29年度事業一覧